はずかしい気持ちを隠した

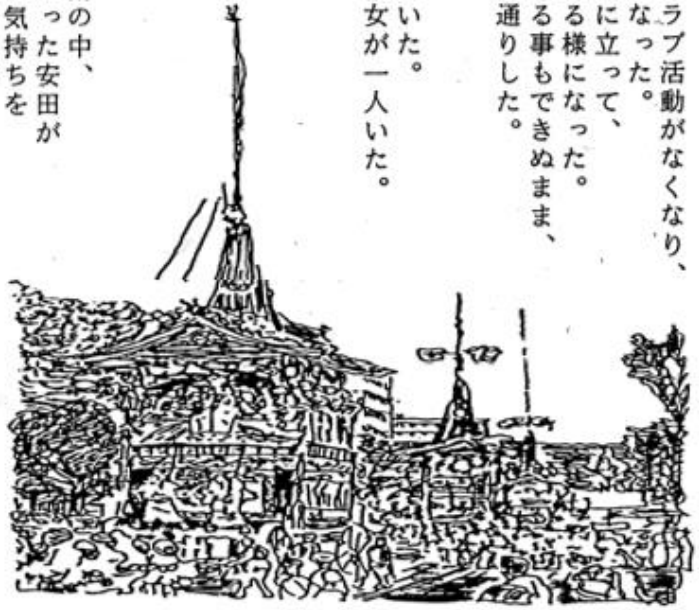
僕の十六才の誕生日、七月四日（土）が来た。
その朝も、僕は彼女を、三条京阪のバス停で見た。
一瞬、お互い、視線があったが、僕の顔はむくみ、目がはれ、
いかにも、僕の顔は、やつれて、疲れ果てていた。
その顔を彼女はじっと見ていた。

やがて、期末試験が近づき、クラブ活動がなくなり、
僕は、早く、家に帰れるようになった。
帰りに彼女が以前の様に、南口に立って、
人を待っている姿を、連日、見る様になった。
それでも、僕は彼女に声をかける事もできぬまま、
瞬時、視線を合わすままに、素通りした。

七月十三日（月）の朝、
バス停のベンチに彼女が座っていた。
バスは行ってしまった後で、彼女が一人いた。
じっと、一点を見つめていた。
僕はじっと彼女を見たが、
僕の方には顔を向けなかった。

祇園祭りの鐘が鳴り、
もう夏休みが近い。
気持ちはあせるばかり。

七月十八日（土）、激しい雷雨の中、
彼女とは小学校の時の同級生だった安田が
遊びに来て、僕は、はずかしい気持ちを
隠しながら、彼女の事を打ち明けた。
そして、いろいろ尋ね、彼女の名前を初めて知った。



477

108 はずかしい気持ちを隠した・・・